

日付:2015年11月22日／聖書:エレミヤ書32:6～15

説教:「回復の希望」

映画『白バラの祈り ゴッティ・シヨル、最期の日々』(2005年独映画)がある。時代は1943年戦争中のドイツにて、ミュンヘン大学の学生によるヒトラー政権への抵抗運動が描かれている。彼らはタイプライターを用いてビラを作り政権の実態を暴き、この戦争が如何に無謀で意味のない戦争であるかを多くの市民に知らせたいと願った。主人公は、このグループのリーダー格であるハンスの妹、ゴッティ・シヨル。ゴッティは、兄のハンス、友人のクリストフと共に反ナチス抵抗組織「白バラ」のメンバーとして抵抗と戦争の早期終結を呼びかけた。

ある日、大学構内でのビラまきを決行する。その結果ゲシュタポ(国家秘密警察)に国家反逆罪として逮捕される。ゴッティは、全てを覚悟し容疑を認め、自分の良心に従って行動した自らの正当性を訴える。勇敢にも取り調べや法廷の中で堂々とヒトラー政権を批判し、この戦争の早期終結を語るが、まだ21歳の女性である。何故彼女がこんなにも堂々と怖い大人たちの前で語れたのか？

今朝の聖書は、エレミヤが牢に閉じ込められていた状況の中で展開。彼が牢にいたのは、まさに国家反逆罪だった。自国(南ユダ国)が戦争している最中に、この戦争で国は滅びる、早く戦争はやめなさい、降参しなさい、と語り続けたら国家反逆行為だと見なされた。そして、牢にいる状況の中で、何故か親族の土地、アナトの地を購入するというお話になる。どうしてそういう話になるのか。戦争でこの国は滅びると言っているのに、土地を買う話はおかしい。敵国に奪われてしまうのは目に見えている。ここの土地購入の話は、神の啓示のゆえであった。エレミヤは、土地購入を事前に神から示されていたので要望を受け入れた。

ここは、何を示しておられるのか？国が他国に奪われて行く状況の中で「畑を買い取る」というのは、今さらの状況がある。しかし、これは神が必ずこの土地を取り戻してくださる。この土地に帰ってくる事が出来るという「回復の希望」を意味している。土地を購入することは、神の希望の言葉に生きるということになる。

ゴッティは、何故こんなにも堂々と怖い大人たちの前で語れたのか？それは、ドイツの新たな回復の希望が見えていたのかと思う。一日も早いドイツの回復を願っていたからであろうと思う。(神谷)